

## 論文

# サモアにおける国際移動と社会システムの関係の再考

## —ある既婚女性の移民経験の事例から—

倉光 ミナ子

### I はじめに

1999年、筆者が初めてフィールドである南太平洋の島嶼国家・サモアを訪問したとき、ある日本人ボランティアから「サモアでは海外にいる家族からモノやお金が届くと、ラジオで名前が流れるんだよ」という話をきき、大変興味を持ったのを覚えている。残念ながら、携帯電話が普及した現在ではその番組は終わってしまったが、サモアの日常生活は相変わらず国際移動・移民と深く関わっている。ポリネシア地域の中で、サモアは最も多くの移民を輩出している。2006年度の国勢調査におけるサモア本国の総人口は180,741人 (Government of Samoa 2008) だが、その人口以上のサモア人とその子孫がニュージーランド、オーストラリア、アメリカ合衆国を中心に生活している<sup>1)</sup> という (山本 2000: 229)。サモア人であれば、「親族が一人も海外にいない」という人はおそらくいないだろう。

1970年代以降、サモア移民に関する研究は盛んに行われてきた。当初はマクロ経済的な視点に立った研究が多く、その主たる目的は資源の限られた島嶼国家であるサモアの経済開発において、サモア移民からの送金 (remittances) が果たす役割を明らかにすることであった。今日では、サモア移民の大半が2世や3世になりつつあるが、依然として彼らからの送金がどの程度維持されるのかということは大きな関心の1つになっている (例えば Shankman 1976; Ahlburg 1991; Brown

1998)。また、1990年代頃になると、地理学者や文化人類学者を中心に、サモア独自の社会システムと関連づけて、サモア人が国際移動をする背景を考察する研究も出現してきた (山本 1989; Lilomaiaava-Doktor 2009)。

一方、サモア移民に関する先行研究の中には、実はジェンダー視点に立った研究やサモア女性移民 (Samoa female migrants) に焦点を当てた研究は少ない<sup>2)</sup>。本稿はそのサモア女性の移動経験に焦点をあてて、サモア人の国際移動とそれに影響を与えるサモア社会システムとの関係について再考することを目的としている。本稿は以下4章によって構成される。まず、II章では、サモア独自の社会システムのあり方と、それらがいかにサモア人の国際移動と関連づけて論じられてきたのかについて先行研究を整理する。III章では、あるサモア女性の移民経験を、特に移動の動機とサモア本国の親族への支援に焦点をあてて紹介する。IV章ではサモア女性の移民経験からサモアの国際移動と社会システムとの関係を捉え直し、V章では今後の課題についてまとめたい。

本稿に関する現地調査は2009年6月から9月にかけて、ニュージーランドのオークランドで行った。サモアからニュージーランドへ国際移動は、第2次世界大戦以降、ニュージーランドが工業化を進める上で、安価な労働力を求めたことを契機に始まった。1950年代～70年代にかけて、特にサモアからの移民は急増し、その多くは工場の集中する限られた都市部に集住した。オークランドは

そうした都市の1つであり、実に50年以上の歴史のある、海外で最大のサモア人コミュニティを有している (Macpherson 1997) <sup>3)</sup>。

今回の調査では、オークランドにおいてサモア女性移民の1世を対象に、半構造的インタビューに基づくライフストーリー法を実施した。この調査にあたり、ライフストーリー法を選択した理由は2つある。1つはオークランドのサモア移民の多様性に対応するためである。サモア人コミュニティの歴史が長いオークランドでは、多様な経歴をもつサモア人が暮らしている。かたや数カ月前にサモアからやってきた人がいるとすると、40代でサモア移民の2世として生活している人もいる。実際に、1970年代からオークランドのサモア移民について研究しているMacpherson教授に調査法について相談すると、「オークランドのサモア人は非常に多様化しているので、量的な調査にはあまり意味がない」(私信 2009) という助言を受けた。したがって、質的調査法の中でも、サモア女性移民の人生に焦点をあてるライフストーリー法を採用することにした。

ライフストーリー法を選択したもう1つの理由はサモア女性の語る「家族 (family)」<sup>4)</sup> を紐解いてみたかったからである。サモアで暮らしていると「家族第一 (family first)」という言葉をよく耳にする。これは何かが起こった時、仕事よりも何よりも「家族」が優先されることを意味している。しかし、サモア語で「家族」を意味する「アイガ (‘āiga)」という語は、サモアの社会生活における重要な単位とされながら、実際にそれがどのくらいの範囲と規模を指しているのかは話されるコンテキストによって異なっている。また、既婚女性の場合、一言「家族のために (for my family)」と言われた時、夫と自分と子どもという核家族的な世帯を意味するのか、それとも自分の生まれ育った家族まで含むのかなど疑問は尽きない。今回はこうした疑問に答えるためにも、ライフストーリー法を使用することで、ある初老の

女性の移動経験にせまってみることにした。

## II 問題の所在

本稿が取り上げるサモアは南太平洋で最も「伝統」を維持している国であるといわれており、その独自の社会システムはマタイ制度と呼ばれている。マタイ制度の基本単位はアイガ (‘āiga) と呼ばれる、いくつかの拡大家族によって構成される親族集団である。基本的に、各アイガは特定の村をベースとし、宅地・耕地を共有し、代々そのアイガに伝わる固有の称号名を有している。その称号名を授与された者はマタイ (matai) と呼ばれ、アイガ経営のリーダーになっている。マタイは、男性も女性も含め、そのアイガに権利を持つ者から、全員の合意の下で選ばれる (山本・山本 1996: 33-35)。原則として女性もマタイになることはできるが、基本的に男性がマタイになることが多い。マタイ制度では、概して相互補完的な「姉妹-兄弟の関係」がジェンダー関係の基軸になっており、兄弟より姉妹の方が社会的に高い地位に置かれている。姉妹を通して、兄弟の名誉は呈示され、姉妹の権威によって兄弟の行動は認められるため、兄弟は常に姉妹を大切に扱い、尊敬しなければならないとされている (Schoeffel 1978: 72)。この関係に基づき、アイガの中で女性たちの意見は無視されることがないため、自分ではなく兄弟に称号名を取らせる女性もいるという (Fairbairn-Dunlop 1991: 88-91)。こうして選ばれたマタイは基本的にはアイガ共有の土地で暮らし、アイガ構成員の労働・資源・作物を管理する。また、対外的には、自分のアイガを代表して村のマタイたちによって構成される合議体に出席したり、アイガの名において行われる儀礼交換<sup>5)</sup> のための財を集め、処理したりする (山本 1989: 305-306)。

マタイ制度に基づいたサモア人の行動規範や慣習は、一般的に「サモア/サモア人のやり方

(the way of Samoan)」といわれる「ファアサモア (fa'aSamoa)」という言葉で総称される。サモア人であれば、父方・母方のいずれかのアイガで活動的な構成員となり、多くはマタイの指示に従い、時には自発的に、できる範囲でアイガに貢献するのが原則とされる。ファアサモアでは個人的な権利よりも、このアイガ全体の繁栄が重視されるため、各個人はアイガ内における自分の位置にふさわしい行動をとることが期待される。また、マタイ、アイガ、そして村に対する奉仕 (service/ tautua) は「権力への道」と呼ばれ、どのくらい奉仕をしたのかが将来マタイに選出される上で重要な決め手の一つとなっている (山本 1989: 305-306; Fairbairn-Dunlop 1991: 65-70)。

このようなアイガのあり方やマタイの役割は、19世紀以降の西欧社会との接触や貨幣経済の浸透により少なからず変容している。特に、1960年代以降の国際移動とそれがもたらした貨幣経済は経営共同体としてのアイガの役割を縮小してきた (Shankman 1976: 57)。それと同時に、マタイ選出の基準となる奉仕の新たな手段として、賃金労働に就くことが重視されるようになり、それがもたらす現金は新たな交換財として儀礼交換の場で大きな位置を占めるようになっていく (Schoeffel 1995: 105)。ただし、これらの変容にも関わらず、今日においても親族集団としてのアイガはマタイの選出とアイガの名の下で行われる儀礼交換の際には強く機能している。

さて、サモア移民からの送金のほとんどが経済的な投資や貯蓄に向かわないこと (Shankman 1976: 63; Fairbairn-Dunlop 1991: 172) が徐々に明らかになってくるにつれ、こうしたサモア独自の社会システムとそれに基づく行動規範はサモア人の国際移動や送金の動機に深く結びついていると論じられるようになった。その1つとして注目されてきたのが「アイガへの奉仕」とそれに付随する称号名の授与との関係である。例えば、マタイ制度が都市化していくプロセスを考察した山本

は、マタイ制度の根幹である称号名の授与の際に、海外で生活している者が選ばれるのは、サモア本国に残っているアイガと海外で生活している者の双方にメリットがあるからだと述べている。サモア本国のアイガは現金化している儀礼交換のために、十分な現金を確保する必要がある。その点、一度マタイになれば、その人にはアイガの名声と繁栄を維持する義務が生じるので、海外から儀礼交換のための現金を送ることになる。その一方、海外で暮らしているサモア人にとっては、マタイになることが、1つには社会的な尊敬を受ける対象になれること、もう1つには称号名にアイガ共有地の使用权などの潜在的権利がついてくるので、何かがあった時に、自分だけではなく自分の子・孫・甥・姪がサモアに戻ることができるという将来の保険として、マタイになるのではないかと論じている (山本 1989: 322-325)。

また、ファアサモアと結びつけて、サモア人の国際移動が生じる背景を論じるサモア人地理学者の Lilomaiaava-Doktor は、サモア人の国際移動は西洋中心的な理論に基づいた経済的な利益の追求によって起こるのではなく、サモアの日常生活において重視される「ヴァ (vā: 関係性relationships)」の養育・維持と結びついていると論じている。ヴァは非常に複雑な現象だが、太平洋地域には広く共通してみられるものである。サモア語のヴァとは直接的には「あわい (a space between)」と訳されるが、一般的には人々、場所、そして社会環境の間にある関係性を育む社会・政治的な合意の中の相互的な尊敬を意味している。Lilomaiaava-Doktorによれば、サモア社会では、自己は個人としてではなく、すべて関係性に基づいて存在するため、日常生活の中において、「家族」、親族集団、村、教会、職場といった、あらゆる人々の間あるいは場所との間の関係性を理解し、それを軽視しない行動をとることが文化的に正しいと認識されているという。サモア人が国際移動をしたり、家族に送金したりする行為は様々なヴァに対

する配慮の1つであり、そうすることでサモア人が日常的に気にかける村の中での「家族」のステータス、名誉、評判などは維持・増進できるという (Lilomaiva-Doktor 2009)。

このように、サモア人の国際移動はサモア独自の社会システムとそれに基づく行動規範と無関係ではないとされる一方で、多くのサモア女性が国際移動をし、送金をしているにも関わらず、そこにジェンダーの視点が含まれることはあまりなかった。例えば、Shankmanは1969年当時のサモアの農村における送金の状況を調査し、男性と女性の違いについて次のように述べている。

女性は最も信頼できる送金者であり、若い未婚女性は近親者に送金することができるので移民を勧められていた。このような若い女性の移民の背後にある動機は若い男性のそれとはどことなく異なっていた。結果として、アイガの影響は男性より女性に対して強かった。サアアシ村からの移民における男女の割合はかなりバランスが取れていたけれども、活発な送金者は女性のほうが多く、より送金する傾向があった (Shankman 1976: 60-61)。

このような指摘があるにも関わらず、なぜ女性の方が頼りがいのある送金者なのか、そもそどのような女性がなぜ移動し、いったい誰に何のために送金するのかという点はその後ほとんど調査されていない。そして、これらの点を理解するには残念ながら先行研究の説明では不十分であると考えられる。例えば、山本が指摘するようなマタイの称号名の授与を見越しての送金は、女性の場合にはもう少し検討が必要である。なぜなら、原則として女性もマタイになることは可能であり、今日でこそ女性マタイは増えつつあるが、現実にはマタイは依然として男性に占められているからである。また、Schoeffelは貨幣経済の浸透とともに、マタイ選出の基準の1つとして現金による貢

献が重視されるようになった結果、女性たちは自分のアイガへの実質的な貢献を通して、自分よりも自分自身の子どもへの称号名の授与を要求するようになったと指摘している (Schoeffel 1995: 105)。

一方、Lilomaiva-Doktorの指摘するようなヴァへの配慮の1つとして国際移動がなされるのであれば、婚姻を通して社会的な地位が著しく変化するサモア女性にとって、どのヴァも等しく大きな意味を持ちえるのかという疑問が残る。もともとマタイ制度では19世紀にキリスト教が布教されるまで「夫—妻の関係」はあまり重要な関係ではなかった。実際に、今日でも女性たちは自分のアイガの中では生涯にわたって高い地位を維持し続けるが、いったん結婚し、嫁ぎ先のアイガに入ると一番低い位置におかれ、夫とその姉妹に従属しなければならないとされるため (Schoeffel 1978)、妻方居住を選ぶ女性いる。また、Iで述べたように、サモア語の「家族」を意味するアイガは多義的な言葉である。そして、今日、儀礼交換の場以外での日常生活の中では、アイガは単に寝食をとるに使う世帯を意味することもある。こうした点に留意しつつ、なぜ、サモア女性は国際移動をし、その後に本国の親族へ支援を行うのか、次章からはある1人の女性の移動経験を取り上げて考察していきたい。

### III シエニおばさんの移動経験

シエニおばさん(仮名)<sup>6)</sup>は筆者がサモアで調査する時に滞在しているファミリーの一員である。サモアではたまたま彼女がニュージーランドから戻っている時に2度ほど会ったことがあり、「サモアは暑いから私の体にはあわない」と言っていたのをよく覚えている。彼女はこうして時々夫がアイガの共有地 (family land) に建てた家に戻ってきているが、普段はオークランド南部の市街地にある自宅で、夫、内国歳入庁 (Inland

Revenue) に勤める独身の次女と3人の孫<sup>7)</sup>と暮らしている。

シエニおばさんのライフストーリーの聞き取りは、2009年7月から9月にかけて、彼女のオークランドの自宅で実施した。筆者がおばさんの家に行く時はいつでも彼女の姉Fの息子(甥)kに車で連れていってもらった。シエニおばさんの自宅につくと、おばさんに迎えられ、彼女の夫が準備してくれた昼食を4人で食べた後に、お茶を飲みながら、英語とサモア語でいたい1時間ずつ話を伺った。基本的には私とおばさんで話を進めたが、つねに甥kと夫はその場におり、ときどき私がわからないことがあったり、おばさんが忘れてしまったことがあったりすると、手助けをしてくれた。

#### 1. 移動の経緯

シエニおばさんは1941年3月10日に、サモアのウポル島南部にある村で、兄2人と姉1人を持つ4人きょうだいの末っ子として生まれた。教員養成校を卒業してすぐに20歳で結婚し、夫の両親およびきょうだい家族と暮らしていたが、1966年8月31日にニュージーランドへやってきた。シエニおばさんはサモアからニュージーランドへ移動した理由を次のように語ってくれた<sup>8)</sup>。

＊：どうして、ここ(ニュージーランド)に来ることを決意したのですか？

A：あそこ(サモア)から逃げ出したかった。サモアには何もなかった…分かるよね。手紙にはニュージーランド(での生活)がどうなのか(書いてあって)、子どもの学校にはいいし、ニュージーランドはいいって(言っていた)。

＊：誰が「ニュージーランドはいい」って言ったのですか？

A：((大笑いしながら)) 子どもの学校に(いって)…分かるよね。

＊：サモアには何もなかったのですか？

A：うーん、私たちの家族はサモアにいたけど、難しかった。

＊：難しかった？

A：あそこではいろいろなことをするのが、もちろん、私たちはここに来る前に働いていたけれど。

ニュージーランドに来る前、シエニおばさんは教員として小学校と中学校で、夫は農業省関係の職場で働いていた。しかし、当時のサモアにはバナナやコブラを輸出するぐらいの産業しかなく、あまり資源がなかった。この当時に、夫婦2人がきちんと現金収入を得ていたにも関わらず、収入は良くなく、子どもを育てるのが難しいと感じていたという。シエニおばさんのニュージーランドへ移動した主たる理由はより良い仕事と子どもたちにとってのより良い環境であったという。

では、シエニおばさんの移動には他の理由はなかったのだろうか。次の機会にさらに聞いてみると、次のようなことを語ってくれた。

＊：先週、おばさんは、サモアでは十分な収入が得られなかったし、子どもたちのことを考えると、ここ(ニュージーランド)に来て子どもを育てた方がよいというのが、ここに来た主な理由だって言っていましたよね？

A：そう。それらが主な理由だよ。

＊：では、それ以外の理由はあるのですか…何というか、主な理由ではないが、大したことのない理由(minor reasons)というか…

A：((笑いながら)) そうだね。生活を変えてみたい…より良い生活に。なぜなら、サモアでは多くの人がいすぎて、自分一人で暮らせないし、自分のこともできなかった。すべてのものを分け与えなければならなかったし。



＊：サモアにいる時に、誰が「ニュージーランドはいい」って言ったのですか？

A：私の義理の姉Lよ。彼女こそ、ここに先に来ていた人よ。

＊：つまり、サモアに居続けたら、あなた自身の家族を発展させることはとても難しかった？

A：そりゃ、そうよ。

＊：どうして？

A：どうして？あの家族よ…分かるよね。たくさんのお親族がいるのよ。私たちは夫の家族と暮らしていたし。

シエニおばさんによると、結婚してからニュージーランドへ移動するまでの5年間、彼女は夫の家族（夫の両親と夫のきょうだい家族）と一緒に暮らしていた。当時はそれが普通だったという。そこではすべてを分け与えなければならず、夫と自分が収入を得ていても、とても生きていけるような状況でなかったという。

＊：それで、どちらの考えだったのですか？あなたと夫、どちらが先に「ニュージーランドへ行くべきだ」と言ったのですか？

A：私よ。私!!! ニュージーランドへ行きたかった。ニュージーランドへ行きたかった!!!すべてのものから逃げ出して…本当に、あの人たち…分かるよね。あそこは刑務所って呼べるわよ…なぜならって、みんな、すごく威張っていて、これしろ、あれしろって言うのよ…わたしの義理の家族。あの当時ときたら…!!!（略）

＊：おばさん…義理の家族と一緒に暮らすのは本当に難しかったんですね？

A：サモアでは本当に難しかった。何もできないし…引っ越せないし…自分たちのことは何もできない…彼らはあれこれ言うし。当時はね…今は違うけど。

こうして、シエニおばさんは25歳の時、夫と4歳の長男、2歳の長女、そして生後1か月の次女をつれて、彼女いわく「家族全員（whole family）」でニュージーランドへ移動した。ニュージーランドに来る前に、当時のサモア移民に求められていた夫の労働ビザと住宅はハミルトンに住んでいた夫のいところを通して準備した。このいところが身元引受人（sponsor）となり、彼女たちをニュージーランドに呼び寄せてくれた。しかし、彼のところには2週間ただけで、彼女たちはすぐに夫の異母姉Lのいたオークランドに移動した。そして、オークランドに来た1ヵ月後には家を借りて、夫は敷物をつくる工場で働き始めたのである。

## 2. 本国にいる親族への支援

シエニおばさんたちはオークランドにやってきて以来、3回引っ越したが、仕事は一度も変えなかった。夫は最初に勤めた敷物をつくる工場で、1990年に退職するまで働いた。おばさんいわく、「給料が良かったので、それにしがみついていたほうがよい」<sup>9)</sup>というわけだ。おばさんは1977年まで家で子どもたちの面倒をみていたが、それから1998年に退職するまでは郵便局で働いた。郵便局では、手紙や小包を扱ったり、郵便為替や電報を処理したりした。2人がニュージーランドで得た収入の一部は、多くのサモア人がするように本国に送られ、以下のように親族<sup>10)</sup>のために使われていた。

### 1) どのような支援をしたのか

シエニおばさんが本国にいる親族に直接的にした支援は大きく3つに分かれていた。1つは送金で、現金を送ることである。これはサモアの親族から連絡を受けて送ることもあれば、自分たちから自主的に送ることもあった。当初は送金を取り扱う会社が無かったので、手紙に入れたり、郵便為替で送ったりしていた。そうして送られたお金はサモアの親族が食料品を買ったり、教会に寄付<sup>11)</sup>したり

するのに使われた。

2つ目は日用品、食料品、そして衣類の送付である。特に、米、砂糖、小麦粉、缶詰などの食料品と衣類を送ったという。これらは半年に1度の割合で、大きな箱を用意し、夫と子どもたちと一緒にそれが一杯になるまで詰め、船便で送っていた。今日では、サモアでも食料品や衣類が豊富になってきたので、モノを送ることはほとんどなく、現金だけを送付しているという。

3つ目は身元引受人である。シエニおばさんたち自身がそうであったように、サモア人がニュージーランドへ行こうとする時には通常、単なる「訪問ビザ」であっても、ニュージーランドにいて身元を引き受けてくれる人が必要である。シエニおばさんによると、自分たちから自発的に誰かを呼び寄せようとしたことはなく、基本的にサモアの親族の誰かに頼まれると、身元を引き受けて、旅費を出したという。また、身元を引き受けた者のうち、ニュージーランドに来て、どこにも行くあてがなかったり、若い独身者であったりした場合には、次の道が見つかるまで自宅で一緒に暮らした。身元を引き受けた者の中には、ニュージーランドに永住しなかった人もいる。例えば、おばさんの兄Tは、家族をおいて出稼ぎに来て、おばさんの家に身を寄せながら3年働き、帰国して自宅を建て直したという。

サモア移民による支援は自分たちの家族・親族だけに向けられるものではない。サモアの村ではアイガによってなされる儀礼交換と教会行事が重要な社会的意義を持っているので、この2つに関わることが起こると、海外にいるからとはいえ無関係ではすまされない。例えば、村の教会グループが教会や牧師の家を建て直そうとする時、サモア移民たちはその資金調達 (fund raising) を支援する<sup>12)</sup>。シエニおばさんによると、10年に一度ぐらい、村の教会グループがこうした資金調達のためにニュージーランドにやってくるという。彼女は夫のアイガの村や自分のアイガの村からの教会

グループを支援していた。また、シエニおばさんは1980年代にマタイになったため、本国での葬式やマタイの称号名就任式等の儀礼交換が執り行われる場合には、アイガの求めに応じて、それに合った送金をしているという。

## 2) 誰を支援したのか

1) においてシエニおばさんが直接的に支援した親族をより詳細に明らかにするために、彼女を起点として、親の世代、子の世代、そして、孫の世代の3世代にわたる系譜を聞き取り、それぞれにどのような支援をしたことがあるのかを調べた。ニュージーランドに来た当時、シエニおばさんには、サモアに母親 (父親は1971年死亡)、兄Tとその家族、姉Fとその家族、兄Eとその家族がいた。おばさんの父親にはおばさん自身がよく知らない3~4名の異母兄弟と妹が1人、母親には同様によく知らない1人の異母姉妹と弟が1人いた。自分の親族では、おばさんは、兄Tとその家族、姉Fとその家族、兄Eとその家族および母の弟 (おじ) とその家族に、現金、食料品、衣類を送ったことがあった (表1参照)。このうち、兄Eの家族には、1990年代に彼らがニュージーランドへ移動したので支援をしなくなり、おじの家族にはおじが亡くなったので支援をやめた。おばさんがよく知らない父と母の異母きょうだいとその家族には何も支援したことはなく、父の妹 (おば) とその家族に対しては、父の妹が父について早くに亡くなったため、現金やモノを送ったことはないという。また、おばさんには父方・母方の双方にたくさんのいとこたちがいるが、誰にも何も送ったことはなかった。

一方、夫の親族では、移動当時、両親、兄Iとその家族、兄Mとその家族、妹Sとその家族がサモアで暮らしていた。夫の父親には姉1人と3人の兄が、夫の母親には3人の異母兄弟がいた。おばさんたちは、夫の両親、兄Mとその家族、妹Sとその家族に、現金、食料品、衣類を送ったことがあった (表1参照)。兄Iとその家族を支援し

表1 サモアの親族への支援（現金・モノ）

親族の内訳			援助の状況			
		子の数	現金	食品	衣類	現在（現金）
自分の親族	兄Tの家族（母を含む）	5	○	○	○	○
	姉Fの家族	6+(3) <sup>1)</sup>	○	○	○	○
	兄Eの家族	5	○	○	○	×
	父の妹（おば）の家族	8	×	×	×	×
	母の弟（おじ）の家族	5	○	○	○	×
夫の親族	両親 <sup>2)</sup>		○	○	○	×
	兄Iの家族	10	×	×	×	×
	兄Mの家族	6	○	○	○	×
	妹Sの家族	4	○	○	○	○
	父の兄（おじ）の家族（3家族）	不明	×	×	×	×
	父の姉（おば）の家族	不明	×	×	×	×

（2009年の聞き取り調査を基に筆者作成）。

注：1）+(3)は自分の子ども以外に世話していた夫の前妻の3人の子どもを意味する。

2）聞き取りからは夫の両親ときょうだいの家族は一緒に暮らしていたと推測されるが、ここでは別々に記載する。したがって両親の子ども数はあえて記入しない。

なかった理由について、おばさんは、兄Iとその妻は働いており、不自由なく暮らしていたからだといった。また、兄Mとその家族に対しても、兄Mが牧師になったのをきっかけに支援をやめていた。なお、おばさんと夫の双方の親族において、現在でも支援しているのはおばさんの兄T、姉F、そして夫の妹Sだけであった。

次に、誰の身元を引き受けたかについて調べてみると、おばさんと夫の双方の親族において、現在、多くの人が海外で暮らしているにも関わらず、全員の身元を引き受けたわけではなかった（表2参照）。おばさんの親族からはきょうだいの子どもたちばかりでなく、姉Fの夫、姉Fの義理の娘g（夫と前妻の娘）、父方のいとこuの子たちと、かなり広範囲にわたって身元を引き受けているが、夫の親族からは兄Mの娘o1人だけであった。

### 3）なぜ、支援するのか

シエニおばさんによると、サモアとニュージーランドでの労働の違いは給料や仕事の規模にあるという。そして、サモアでは「働きたかったから働いた」が、ニュージーランドでは「働かなければならなかった」とも語った。一方、サモアとニュージーランドで、労働に関して共通する点は「家族を助けること（to help the family）」がその目

的であったことだ。

\*：おばさん、サモアにお金を送ったのですか？

A：もちろん。最初は姉のF、兄のT、そして夫の家族に。

\*：何のために？なぜ？

A：助けるために…分かるよね。//k：教会のこととかを助けるため…//A：教会のこと、食料品の購入、教会への献金…（サモアから）言ってきたら、あげたわ。島の人々は…彼らはいつもそこにいて…分かるよね…どんどんあげなければならないの（give, give, give）。（（略））「手元におくこと」ではなく、「あげること」を覚えておかないと（（大笑い））。そう…でも今は違う。不景気だから（（大笑い））。

\*：不景気だから…何というか、オークランドの人は誰もお金を送れない？

A：そう。そんなところ。（（せきをして声を改める））そうね、今は確かに大変。でもまだ大丈夫。（（サモア語で））もし家族を愛しているのなら、あげなさい。もしできるのなら。（（英語で））あなたの心の中にあるものを感じているのなら、それは価値あ



表2 親族において身元を引き受けた人

親族の内訳		現在、海外にいる人 <sup>1)</sup>	身元を引き受けた人
自分の親族	兄Tの家族	兄の息子 a 兄の娘 b (NZ) 兄の娘 c (AS) 兄の娘 e (AS)	母 兄 T 兄の娘 c
	姉Fの家族	姉の義息 f <sup>2)</sup> (AUS) 姉の義娘 g (AUS) 姉の息子 k (NZ)	姉の夫 姉の義娘 g 姉の息子 k 姉の息子 l
	兄Eの家族	兄の娘 o (NZ) 兄の息子 p (NZ) 兄の娘 r (NZ) 兄の息子 s (NZ)	兄 E の家族
	父の妹の家族	いとこ v (女・NZ) いとこ y (男・NZ) いとこ z (男・NZ)	いとこ u (男) の息子 いとこ u (男) の娘 いとこ u (男) の娘
	母の弟の家族 異母姉の家族	いとこの何人か (NZ) 異母姉の家族 (NZ)	
夫の親族	兄Iの家族	兄の子 a <sup>3)</sup> (NZ) 兄の子 b (NZ)	
	兄Mの家族	兄の娘 m (AUS)	兄の娘 o
	妹Sの家族	妹の娘 q (NZ)	

(2009年の聞き取り調査を基に筆者作成)。

注：1) 「NZ」はニュージーランド, 「AS」はアメリカ領サモア, 「AUS」はオーストラリアに滞在していることを意味する。

2) 姉の夫と前妻の間に生まれた子どもたち。

3) 夫の兄 I の家族については詳細が分からないということで、子どもの性別は不明である。

ることよ…分かるよね。

\*：ふーん…向こう（サモア）から頼まれたら送るのですか、それとも自主的に送るのですか？（k が質問をおばさんに説明してくれる）

A：そう、彼らから頼んできたり、こちらから単にあげたり。もし誰かが入院して、「ああ、姉にお金を送った方がいいかな。彼女は入院しているんだから」と感じたら、単にあげるだけ。

\*：なるほど。

A：こうやって愛をみせる (show your love) わけ。それがあなたの心の中にあるもの。なぜなら、ミナ子、他にあなたの愛をあなたの愛している誰かにみせる時はないのよ。特にあなたの家族に対して…誰かが入院している時（ぐらいしか）。((略)) 先月

も夫の妹にお金を送ったばかりよ。

\*：（彼女は）病気だったんですか？

A：病気だったのよ。入院していたから…今、私たちはどんどん年をとっていて、あまりお金を送れないけど、できる時は送るのよ。

以上のように、筆者が支援する理由を聞くたびに、彼女が強調したのは「愛 (alofa)」と「あなたの心の中にあるもの (what is in your heart)」であった。この他に、シエニおばさんは次のようにも説明している。

\*：「あげる」のがサモアの慣習って言いましたよね。それについてもう少し知りたいのですが…なぜ、あげなければならないのですか？

A：えっと、それはすべてあなたの心の中にあるものによるわね…分かるよね。もしあなたが持っていて、彼らを愛しているのなら、あなたは彼らを助けたいよね。もし、あなたが十分に持っているのなら、彼らにあげるでしょう。それは聖書にも書いてあることよ。

＊：聖書に書いてある？

A：そう、「愛せよ」って。

＊：「愛せよ」？

A：「汝の隣人を愛せよ」よね。それが聖書の教えでしょう…誰があなたの隣人なの？あなたの隣人は、あなたの母、父、そしてきょうだい、いとこたちでない？（略）

＊：それだから、あなたは十分に持っていたら、あげるのですか？

A：そう、もし十分に持っていたら、でもすべてをあげるのではないし、いつでもあげるわけではない。（略）

＊：もし十分に持っていなかったら、あげる必要はない？

A：ないね。

ニュージーランドでの生活も決して楽ではなかったが、お婆さんはそれでも支援をやめたいと思ったことはないという。なぜなら、それはすべて自分の心からくるもので、「愛」を持っていて、できるのであれば、あげなければならぬと考えているからである。シエニお婆さんは夫と自分が退職した現在でも、頼まれれば自分たちの年金からサモアの親族へお金を送っているという。

#### IV 考察

これまでの研究では、サモア人の国際移動や送金の背景にはサモア独自の社会システムとそれに基づく行動規範が深く関連していると論じられてきた。この点に関連して、シエニお婆さんの移動

経験から少なくとも次の2点が明らかになった。第1に、「家族」とは、マタイ制度の基盤である親族集団であるアイガ全体を指すのではなく、自分の両親・きょうだいといった近親者のことであった<sup>13)</sup>。そして、近親者であっても、特に現金やモノの送付という点で、誰を支援するのかは相手の経済状況によっていた。例えば、きょうだいだからといって、盲目的に支援したわけではない。支援をしても、牧師になったり、ニュージーランドへ移動して来たりと、近親者が経済的に裕福になったとみなせば、それ以上の支援は行われていなかった。また、シエニお婆さんたちは両親・きょうだいの家族を中心に支援していたが、両親のきょうだい（おじ・お婆）やいとこへの支援はあまりしていなかった。さらに、お婆さんの母方のおじのように、支援の中心となる近親者が亡くなった場合、その家族が残されていても、支援をしなくなっていた。

また、既婚女性の場合、自分の親族と夫の親族を比べた場合、少なからず支援の程度が異なる可能性があることも指摘できるだろう。例えば、表2にあるように、シエニお婆さんの場合、夫と自分の親族を比較すると、圧倒的に自分の親族の身元を引き受けていた。また、現金とモノの送付に関してても、自分のきょうだいとその家族には積極的に支援してきたのに対し、夫の兄Mの家族には一度も支援を行っていなかった。シエニお婆さんによると、兄Mは中華系のスーパーマーケットで、その妻は郵便局で働いていたので、裕福で支援する必要はなかったというが、同程度の収入はお婆さんの兄Tの家族や姉Fの家族も得ていたと考えられるので、やはり夫の親族に対してはあまり積極的に支援してこなかったのではないかと推測される。

第2に、サモア女性による本国の親族への支援のあり方は、Lilomaiva-Doktorが指摘するヴァ（vā：関係性）の養育・維持と無関係ではないことが明らかになったが、同時に夫の親族とのヴァ

の養育・維持には、むしろある種の葛藤が付きま  
とっている状況が窺い知れた。例えば、シエニお  
ばさんは夫の親族と暮らしていたことを移動の些  
細な理由としていたが、彼女の言動からそれが主  
たる理由であったのではないかと考えられる。な  
ぜなら、彼女はいかに夫の親族との暮らしがつか  
く厳しいものであったのかを、「サモアでは私た  
ちは自分たちのために何もできなかった」と何度  
も繰り返し強い口調で語り、夫ではなく自分の考  
えでニュージーランドへ行くことを決めたとって  
いた。また、それを示唆するかのように、彼女  
は次のようにも語っている。

＊：もしサモアで暮らし続けていたら、まだ現  
金を渡さなければならなかったのですか？

A：((略)) 働いているのなら、サモアでいく  
らかの現金がある (ので) …あなたは彼ら  
とお金を共有しないといけな

＊：夫の家族 (in-laws) と共有しないといけな  
い？

A：そう。

＊：自分の家族 (your own family) と共有し  
ないといけな

A：それを断ることはできないよね。((微笑  
む)) 分かるよね。

＊：それでは家族から離れてニュージーランド  
で暮らした方が楽ですか？

A：そうね… ((ちょっと考え込んでから)) そ  
う思う。

＊：自分自身の家族 (の発展) に集中できる？

A：そう。

その一方で、彼女が語る支援の理由から分か  
るように、彼女にとっての支援はすべて親族へ  
の「愛 (alofa)」を体現している。そして、それ  
は彼女自身が「ヴァがなければ、愛はない。そし  
てあなたは何もできないし、誰にも持っているも  
のをあげるができない」と語ったところから

も、ヴァに基づいているといえる。実際に、彼女  
は口では「十分に持っていなければ、あげる必要  
はない」というが、頼まれたことは決してその場  
では断らないともいう。

＊：もし (送金) でなければ、「いいえ、私  
たちはお金がない」と言えるのですか？

A：そう。でも送るよ。私たちは次の機会に…  
お金を得たときに (送るの)。例えば…こ  
ういう風に言うの。「今週はないけど、来週  
まで待って。年金がでたら、お金を送るか  
ら」。その方が簡単でしょ。何も分け与え  
なければ…私は生きていけないでしょう。

＊：夫の家族 (your family in-laws) にもあなた  
の愛をみせる必要があったのですか？

A：ええ、いつも頼んでくるから。彼らは電  
話してきて…私たちに言うの…「助けて  
(alofa mai)」って。誰かが病気だとかなん  
とか…。((強調して)) もしできるのなら  
ば、あげなければならない。単に「送れな  
い」といって、電話を切るのではなくて。

シエニおばさんにとって、サモアにいる時は夫  
の親族と暮らし、すべてのものを共有することは  
ある意味耐え難いことであった。しかし、ニュー  
ジーランドへ行ったらといて、自分たち家族  
が得たものを夫の親族と共有するのを完全に拒む  
わけではなかった。それはヴァを重視するサモア  
人にとっては、たぶん不可能なことであったのだ  
ろう。むしろ、彼女はサモアから離れたことで、  
自分たちの都合にあわせて、夫の親族、自分の親  
族、村やアイガへの貢献をやりくりすることがで  
きるようになったのではないかと考える。

Lilomaiaava-Doktorは、ヴァへの配慮のために、  
サモア人は移動を繰り返すと論じているが、シエ  
ニおばさんが語った移動の動機と支援の理由を通  
して見えてきたのは、いかに夫の家族・親族と付  
き合うのか、そのヴァの取り方に苦心しているサ

モア女性の姿であったといえる。単にヴァへの配慮やアイガを発展させるため（to develop their 'āiga）という理由で移動の動機を理解したのでは、シエニおばさんが抱えていたような夫の親族や彼らとの関係性を平和的に維持するための葛藤はみえてこない。シエニおばさんの事例は、むしろ国際移動という選択によって、既婚女性が親族との物理的な距離を取ることで、心理的な空間であるヴァの維持を可能にしたのではないかととも理解できるのである。

その一方で、今回の調査で明らかにできなかったのは、マタイの称号名の授与が、どの程度女性移民の送金行動に関係してくるのかという点である。確かに、シエニおばさんは1980年代に兄の計らいで父方のアイガから称号名を得ている。しかし、なぜおばさんに称号名が授与されたのかを明らかにするためには、サモア本国の親族に対して調査をしなければならない。また、シエニおばさんの3人の息子のうち、称号名を持っているのは長男のみである。この点に関して、おばさんは、娘たちには必ずしも必要ないが、他の息子たちには称号名がほしいといっていた。また、甥kとの会話の中で、自分のアイガの別の家族は、皆、称号名を授与されたのに、自分の家族はまだだとも話していた。筆者は偶然にもサモアにいた時に一度だけおばさんのアイガのマタイ選出を決める話し合いの場に同席したことがある。その時、ニュージーランドにいる者か、サモアにいる者か、どちらに称号名を与えるのかが議論されていたが、おばさんの姉Fは「ニュージーランドにいる者は何もしない（実働的に村やアイガのことは何もできない）。サモアにいる者に与えるべきだ」と訴えていた。このようにマタイ選出の基準自体をめぐる状況が動きつつあるかもしれない中で、そこにどのように移民とその送金に関わってくるのかは、今後、男女ともに、さらなる調査が必要となるだろう。

## V おわりに

本稿は、ある1人のサモア女性が、なぜサモアからニュージーランドへ移動したのか、そして本国の親族に対し、どのような支援を行ってきたのかという点を明らかにすることで、サモア人の国際移動とその社会システムとの関係について再考してきた。彼女の事例を通して明らかになったことは、「家族第一」といわれるサモアにおいても当然のことながら「家族」の中身は多様で、それぞれの関係性の中に葛藤があること、それでいながら、それと上手につきあうために国際移動という手段をとる可能性があることであった。また、今回の調査では、シエニおばさんがマタイでありながら、先行研究で指摘されている称号名の授与と送金の関係性については考察できなかった。さらに、シエニおばさんが支援をする理由として、よく口にした「愛（*alofa*）」が、ファアサモアの一部として、どのように国際移動を取り巻く行動に作用しているのかも十分に論じられなかった。これらの点についてはもう少しの事例を集めて、さらに検討していきたい。

ジェンダー視点に基づいてフィジーからの移民を概観している Chandra は、特に女性たちが国際移動をする理由の1つとして家族的・コミュニティ的な圧力からの逃避があると指摘している (Chandra 2004: 189)。今後は、この点に関して、既婚女性たちとともに、さらに1960年代に独身でいながら移民したサモア女性も対象に含め、彼女たちがなぜ移動したのか、そして移動後に本国の家族・親族とどのような関係性を維持してきたのか、さらに調査していきたいものである。

## 謝辞

本研究の実施にあたり、2009年度天理大学海外特別研修制度を使用しました。調査をするにあたり、Massey UniversityのCluny Macpherson教授、University of AucklandのPhyllis Herda教授、およ

び Auckland University of Technology の Juliet Boon Nanai 博士とその家族には大変お世話になりました。ここに記して感謝申し上げます。

## 注

- 1) 各国の国勢調査によると、アメリカ合衆国には2010年当時に推計114,796人 (U.S. Census Bureau 2010)、ニュージーランドには2006年当時に131,103人のサモア人が生活している (Statistics New Zealand 2007)。
- 2) ジェンダー視点に立った移民研究が少ないというのはサモアに限られたことではなく、太平洋の移民研究における一般的な傾向である (Connell 1984; Connell and Voigt-Graf 2006)。
- 3) 2006年のニュージーランドの国勢調査によると、オークランド周辺の人口構成ではヨーロッパ系が56.5% (全国では67.6%)、アジア系が18.9%、太平洋系が14.4%を占めている。サモア人はこの太平洋系住民の中でも最大の民族集団を形成している。オークランド周辺にはニュージーランドにおけるサモア人居住者の67%にあたる約87,000人が暮らしている (Statistics New Zealand 2007)。
- 4) 本稿ではサモア人が英語で family と言う場合、それを「家族」と表記する。ただしIV章での語りの部分のみは、必要に応じて、英語表記を併記するだけにする。
- 5) 結婚式、葬式、マタイの称号名就任式などの機会に姻戚関係に基づいて行われる交換の儀礼。サモアの儀礼交換は概して「競争的」であり、相手方に負けない質や量の交換財を送ることで、自分のアイガの名誉が保たれ、尊敬を得ることができると考えられている (山本・山本 1996: 1-17)。
- 6) 彼女は親族内では広く「Aunty Sieni」と呼ばれているため、ここでもそれに倣いシエニおばさんと記していくことにする。
- 7) 3人の孫はそれぞれおばさんの長男、長女、次男の息子であり、おばさん宅の近くの高校に通っている。

- 8) 本稿で使用する語りはライフストーリー法のトランスクリプトの凡例に基づいている：①筆者は「\*」、シエニおばさんは「A」、おばさんの甥は「k」、それ以外の登場人物もアルファベットで表した；②( ) 内は発話されていないが筆者が補って文章をわかりやすくしたもの；③//は同時発話で、短く挿入したもの；④((笑いながら))はそのときの状況や様子を表したもの、((略))は会話の省略である。
- 9) おばさんの夫は時としてダブルシフトや超過労働をこなすことで、だいたい週に500~600ニュージーランドドルを稼いだという。
- 10) 本稿では、これ以降、基本的に夫・妻・子どもで構成される核家族を“家族”と記し、その家族を含めた大家族 (例えば、両親ときょうだい家族) を“親族”と記すことにする。
- 11) サモアでおばさんの親族が所属している宗派は様々な献金を募ることで有名である。おばさんによると、週ごとの献金ではなく、年末に行われる「タウラガ (taulaga)」という大規模な献金 (サモアの教会や教会の教育施設への援助、海外への助け合いのための募金) の時に、自分の親族へ送金していたという。
- 12) 資金調達の仕方は社交の場を設け、そこで披露されるダンスなどのパフォーマンスに対して、人々がお金を出すのが通例である。
- 13) この点に関して、1960年代の送金を調査した Shankman はある村における活発な送金者は娘や息子といった近親者であると指摘している (Shankman 1976: 59)。

## 文献

- 山本真鳥 1989. 都市化の中の首長システム—西サモアにおける首長称号保持者間の役割分化, 国立民族博物館研究報告別冊6: 301-329.
- 山本真鳥 2000. 隙間に生きる人々—あるサモア移民家族のハワイ暮らし. 森廣正編『国際労働力移動のグローバル化—外国人定住と政策課題』(比較経済研



- 究所研究シリーズ15) 229-271. 法政大学出版局.
- 山本 泰・山本真鳥 1996. 『儀礼としての経済－サモア社会の贈与・権力・セクシュアリティ』弘文堂.
- Ahlburg, D. A. 1991. *Remittances and their impact: A study of Tonga and Western Samoa*. Canberra: The Australian University.
- Brown, R. P. C. 1998. Do migrants' remittances decline over time? Evidence from Tongans and Western Samoans in Australia. *The Contemporary Pacific* 10: 107-151.
- Connell, J. 1984. Status or subjugation? Women, migration and development in the South Pacific. *International Migration Review* 18-4:964-983.
- Connell, J. and Voigt-Graf, C. 2006. Towards autonomy? Gendered migration in Pacific Island countries. In *Migration happens: Reasons, effects and opportunities of migration in the South Pacific*, ed. K. Ferro and M. Wallner, 43-62. Wien: LIT Verlag GmbH & Co. KG.
- Chandra, D. 2004. International migration from Fiji: Gender and human development issues. *Asian and Pacific Migrant Journal* 13-2:179-204.
- Fairbairn-Dunlop, P. 1991. *E au le inailau a tamaitai: Women, education and development Western Samoa*. Ph.D thesis, Department of Geography, Macquarie University.
- Government of Samoa. 2008. *Report of the Population and Housing Census 2006*. Apia: Government of Samoa.
- Lilomaiaava-Doktor, S. 2009. Beyond "migration": Samoan population movement (malaga) and the geography of social space (vā). *The Contemporary Pacific* 21: 1-32.
- Macpherson, C. 1997. The Polynesian diaspora: New communities and New Questions. *JCAS Symposium Series* 3: 77-100.
- Schoeffel, P. 1978. Gender, status and power in Samoa. *Canberra Anthropology* 1-2: 69-81.
- Schoeffel, P. 1995. The Samoan concept of feagaiga and its transformation. In *Tonga and Samoa: Images of gender and polity*, ed. J. Huntsman, 85-109. Christchurch: University of Canterbury.
- Shankman, P. 1976. *Migration and underdevelopment: The case of Western Samoa*. Colorado: Westview Press.
- Statistics New Zealand 2007. *Samoan people in New Zealand: 2006*. Wellington: Statistics New Zealand.
- U.S. Census Bureau 2010. *Selected population profile in the United States*. [http://factfinder2.census.gov/faces/tableservices/jsf/pages/productview.xhtml?pid=ACS\\_10\\_1YR\\_S0201&prodType=table](http://factfinder2.census.gov/faces/tableservices/jsf/pages/productview.xhtml?pid=ACS_10_1YR_S0201&prodType=table) (last accessed. 29 January 2012) .

---

くらみつ・みなこ (45回生)  
天理大学国際学部

## Reconsideration of the Relationship between International Migration and Social System in Samoa: A Case of One Female Married Migrant's Experiences

KURAMITSU Minako (Faculty of International Studies, Tenri University)